論文

尖閣諸島に関する中国史料の研究(二)

－使琉球録の検証を中心に－

Chinese Historical Records Concerning Senkaku Islands (Ⅱ): A Study of *Shi Liuqiu Lu* and *Liuqiu Guozhi*

班　偉[1)]

Han　I

キーワード：尖閣諸島、釣魚島、使琉球録、琉球国志
Key Worlds: SenKaku Islands, Diaoyu Dao, *Shi Liuqiu Lu*, *Liuqiu Guozhi*

はじめに

尖閣諸島の領有権を主張する際、中国・台湾側が取り上げた「有力な証拠」の中に、『順風相送』などの海道針経と並んで、『使琉球録』『琉球国志』といった文献史料も「切り札」の部類に入っている。いずれも明清王朝から琉球国に派遣された冊封使が著した復命書や見聞録の類で、総称して使琉球録ないし冊封使録と呼び習わされてきた。書中の航程記載や過海図・針路図に「釣魚嶼」「黄毛嶼」「赤嶼」などの島名が記されており、「見古米山、乃属琉球者」「黒水溝」「中外之界」といった字句も散見されるため、中台側に利用されたわけであるが、原文を精査すれば分かるように、これは史料を曲解したり不利な史料を隠したりするなど小細工を施した作為の結果に過ぎない。本稿では、「航程記載の読み方」「琉球船員の反応と役割」「“黒水溝”“中外之界”の虚実」という三つの角度から史料検証を行い、中台側にとっての「不都合な真実」を明らかにしたいと考える。

一、冊封使の派遣と使琉球録の成立

周知のように、14 世紀後半の三山時代から、1872～79 年の琉球処分を通じて明治日本に併合されるまでの約五百年の間、琉球王国が明清王朝と冊封－朝貢の関係を結んでいた。冊封とは、中国皇帝の名において周辺国の王の地位を認め、称号を授ける手続きや儀礼のことを言う。片や朝貢（進貢）とは、周辺国の王が中国へ使節を派遣し、皇帝に貢物を献じ服従を表明する行為を指す。今日のような対等の立場に基づく外交関係ではなく、宗主国対従属国という上下関係を前提としたものではあるが、朝鮮・安南・占城・琉球・暹羅・

1)山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

蘇禄など周辺諸国の為政者からすれば、中国皇帝の承認というお墨付きをもらって自らの権威づけになる上、返礼として貢物の何倍もの価値ある賜り物を授けられるという経済面のメリットも極めて大きかった。古代アジアでは、冊封－朝貢の関係を結ぶことによって、初めて中華帝国との交流・貿易が認められるため、この種の付き合いは、いわば外交と貿易の両面を兼ね合わせた当時の国際秩序だったと言えよう。

1368 年、元朝を滅ぼして天下統一を果たした明太祖朱元璋は早速、近隣諸国に使節を送り、明を中心とする国際秩序への参入を催促した。1372 年、琉球国に行人楊載が遣わされ、これに応じた中山王察度が弟の泰期を入貢させた。これが中琉交渉の始まりである。1404 年、察度の跡を継いだ武寧は明成祖に父の死を報告し、冊封を請うた。成祖の派遣した使節時中によって冊封を受け、「琉球国中山王」としての地位を安堵されたが、これ以後、琉球国の王位継承者は必ず中国皇帝の冊封を受ける慣わしとなった。

琉球冊封使は、皇帝から琉球国王に任命する詔勅を預かって、都の北京から福建へ赴き、福州で専用の船（封舟）を建造し、それに乗って東シナ海の荒波を乗り越えて琉球へ渡るのだが、その使命と言えば、先代国王の霊を慰める儀礼（諭祭）、その後継者たる世子を新国王に封ずる儀礼（冊封）という二つの重要なセレモニーを執行することである。思えば、彼らは「華夷秩序」という中華帝国の伝統的な外交理念に基づいた冊封体制を、遥かなる異国の地で演出し、支える外交官の役を担っていた人物と言ってよい。琉球冊封使の派遣は、初代の時中から数えれば、1866 年に派遣された最後の使節趙新まで、明代 15 回と清代 8 回を合わせて計 23 回に及ぶ（研究者によって数え方が違い、異説もある）。

冊封使節団の規模は大抵五百人前後で、正使と副使を除いて、通訳・書記・従客・医師・護衛将兵・船員・職人・料理人・雑役など様々な身分の人が随行する。一行が封舟 2 隻に分乗して琉球へ渡って行くが、季節風と海流の関係で、通例として夏至前後（旧暦 5 月頃）に福州の港を出帆し、西南風に乗って一週間ないし二、三週間かけて那覇港に到着する。首里城で一連の儀式や行事を執り行った後の数か月間、「天使館」と呼ばれる迎賓館に起居し、ひたすら風待ちをする。冬至前後（旧暦 11 月頃）、東北風が吹き始めると帰帆を揚げて帰国の途につく。この間、琉球の役人・文士たちと饗宴・詩賦・歌舞に興ずることもあるが、もともと文人墨客である冊封使の中に、現地調査をしたり公務日誌を整理したりして著述に励む者が多かった。その筆耕のお蔭で、多種の使琉球録が後世に残り、古代琉球の歴史文化はもとより、昔日の尖閣諸島を知る重要な手掛かりにもなるのである。

もっとも、すべての冊封使が使琉球録を著したわけではないし、すべての使琉球録には尖閣諸島に関する記録があるわけでもない。現存する使琉球録は、第 11 回冊封使を務めた陳侃に始まり、明代 5 点と清代 7 点を合わせて計 12 点に上る（同行正使・副使の著作、あるいは同一人物による複数の著作は 1 点と数え、詩文集が含まれない）。以下、正使名－副使名－派遣年－西暦－題名の順で、使琉球録のリストを挙げておく。

1. 陳　侃、高　澄、嘉靖十三年、　1534 年、陳　侃『使琉球録』、高澄『操舟記』
2. 郭汝霖、李際春、嘉靖四十年、　1561 年、郭汝霖『重編使琉球録』
3. 蕭崇業、謝　傑、萬暦七年、　1579 年、蕭崇業『使琉球録』、謝傑『琉球録撮要補遺』
4. 夏子陽、王士禎、萬暦三十四年、1606 年、夏子陽『使琉球録』
5. 杜三策、楊　掄、崇禎六年、　1633 年、胡　靖（従客）『琉球図記』
6. 張学礼、王　垓、康熙二年、　1663 年、張学礼『使琉球紀』『中山紀略』

7. 汪　楫、林麟昌、康熙二十二年、1683 年、汪　楫『使琉球雑録』『中山沿革志』
8. 海　宝、徐葆光、康熙五十八年、1719 年、徐葆光『中山傳信録』
9. 全　魁、周　煌、乾隆二十一年、1756 年、周　煌『琉球国志略』
10.趙文楷、李鼎元、嘉慶五年、　1800 年、李鼎元『使琉球記』
11.斉　鯤、費錫章、嘉慶十三年、　1808 年、斉　鯤・費錫章『続琉球国志略』
12.林鴻年、高人鑑、道光十八年、　1838 年
13.趙　新、于光甲、同治五年、　1866 年、趙　新『続琉球国志略』

このように、計 23 回派遣された冊封使のうち、約半数の 12 名が使琉球録を書き残した計算になる。書名からは「使琉球録」と「琉球国志」の二種類に大別されるが、前者は航海日誌や公務執行日程を綴った復命書であるに対し、後者は琉球事情の報告に重点を置く見聞録的要素が強い。陳侃らの執筆動機と言えば、物品調達・封舟建造・船員募集・渡航の危険・現地調査など、自ら味わった苦労を後輩冊封使にさせたくないという思いで、いわば申し送り書としての性格が強い。清代に入ってから、皇帝から琉球事情調査の任務も与えられたため、使琉球録の性格は次第に琉球地方志へと変貌していく(1)。

二、航程記載と過海図の読み方

尖閣諸島に関する記載が登場する中国史籍の中で、著者と成書年代が判明したものとして、陳侃の『使琉球録』は最古の記録となる。福州の港を出帆した封舟は、那覇を目指して東シナ海を航行する途中、今の尖閣諸島を含む幾つかの標識島を目印に、その北側を通るのが常であった。この際、船が航路に沿って正しく航行しているかを確認するために、冊封使は絶えずこれらの標識島に留意し、航海日誌に書き留めるようにしていた。中台の論客は使琉球録の中の片言隻語を根拠に、「釣魚島は明代から中国の領土」と主張するが、使琉球録の尖閣記載は決して一様ではなく、曖昧な箇所、矛盾する記述、記録欠如など混乱も少なくない。以下、年代順に関連史料を取り上げて検証していく。

先ず、陳侃『使琉球録』の「使事紀略」から始めよう。「至八日、出海口。……九日、隠隠見一小山、乃小琉球也。十日、南風甚迅、舟行如飛。……過平嘉山、過釣魚嶼、過黄毛嶼、過赤嶼、目不暇接。……十一日夕、見古米山、乃属琉球者。」(2)（五月八日、やっと海に出た。……九日、微かに小島が見えた。小琉球である。十日、南風が強く、舟はまるで飛ぶようだった。……平嘉山を過り、釣魚嶼を過り、黄毛嶼を過り、赤嶼を過り、次々と目まぐるしく島影が過ぎていった。……十一日の夕方に古米山が見えた。すなわち琉球領だ。）この一節を巡って、中台側が「陳侃は古米山（沖縄久米島）から琉球領に入ると明言しているので、赤嶼（赤尾嶼）までは中国領だ」と解釈するが、問題は文中、「小琉球」「平嘉山」「釣魚嶼」「黄毛嶼」「赤嶼」といった島嶼の帰属について、何一言も触れていない。史料の文意から、古米山までの島々は「琉球領外」と断定できるとしても、だからと言って、「中国領内」と決め付けるのは早計である。「琉球領に非ず」と「中国領なり」はイコールではないのだ。

陳侃は『使琉球録』「群書質異」の中で、「山川、則南有太平山、西有古米山、馬歯山、北有硫黄山、熱壁山、灰堆山、移山、七島山」と記し、琉球国の領域に対する明確な認識を示している。ただし、その文脈として「琉球国……山川、龜鼈嶼在国西、水行一日。高華嶼在国西、水行三日。彭湖島在国西、水行五日」という『大明一統志』の記述に対し、

古米山などの島を挙げ、「……蓋不止黿鼈等嶼、彭湖等島而已」と弁明しているわけである(3)。『大明一統志』を踏襲し、澎湖列島まで琉球領とする以上、陳侃が「釣魚嶼」「黄毛嶼」「赤嶼」を中国領と見做すことは考えにくい。況や「小琉球」と呼ばれた台湾でさえ、当時「化外之地」と目され、清の版図に編入されたのは 1684 年のことである。

次いで、郭汝霖『重編使琉球録』の「使事紀」を見てみよう。「二十九日、至梅花開洋。……過東湧、小琉球。三十日過黄茅。閏五月初一日過釣嶼。初三日至赤嶼焉。赤嶼者、界琉球地方山也。再一日之風、即可望姑米山矣。」(4)（五月二十九日、梅花を出航した。……東湧と小琉球を通過した。三十日に黄茅を過った。閏五月一日に釣魚嶼を通過した。三日に赤嶼に着いた。赤嶼は琉球地方を界する島である。更に一日の風で、姑米山が現れるだろう。）ここで、郭汝霖は「赤嶼」を以って琉球領の境目とし、「古米山」を境目とする陳侃の認識と食い違う。「赤嶼」が「古米山」の西へ二百キロ以上も離れており、郭汝霖の記述を素直に読み解くなら、「赤嶼から琉球領に入る」と解されよう。帰国後に提出した上奏文の中で、彼がより明確な表現を使って、「行至閏五月初三日、涉琉球境、界地名赤嶼。」(5)（閏五月三日、琉球の領域に到達した。分界の名は赤嶼と言う）と記し、「琉球領は赤嶼から」という認識をはっきり示している。

蕭崇業『使琉球録』の巻頭には「琉球過海図」と針路が載っている。広石→梅花所→東墻山→平佳山→小琉球→鶏籠嶼→花瓶嶼→彭佳山→釣魚嶼→黄尾嶼→赤嶼→粘米山→馬歯山→那覇港へと封舟が島伝いして渡航するルートが記され、針路は以下の通りだ。「梅花頭、正南風東沙山。用単辰針六更船、又用辰巽針二更船、小琉球頭。乙卯針四更船、彭佳山。単卯針十更船、取釣魚嶼。又用乙卯針四更船、取黄尾嶼。又用単卯針五更船、取赤嶼。用単卯針五更船、取粘米山。又乙卯針六更船、取馬歯山。直到琉球大吉。」(6)ところが、「使事紀」に記された自らの渡琉航程を見ると、「釣魚嶼」「黄尾嶼」「赤嶼」といった島名が見当たらない(7)。また帰国後に提出した題奏（報告書）には、「二十二日、梅花所開洋。次日東風劇作、舟折而之南、因是遂迷針路。連行数日、茫無一山。……漂流不遠、三十日望見葉壁山。」(8)（五月二十二日に梅花所を出航した。翌日、東風が烈しくなり、舟は南に流されてしまった。遂に針路を誤り、連日茫々として島影一つもない。……暫く漂流した後、三十日に伊平屋島が現れた）と書かれている。つまり、蕭崇業の乗った封舟が航路から外れてしまって、釣魚嶼を通過することがなかった。彼は釣魚嶼の存在を知っているものの、自ら目睹したわけではない。その過海図と針路は、恐らく海道針経か何かの種本に基づいて作られた想像図・抄録であろう。

夏子陽『使琉球録』にも「琉球過海図」があり、構図は蕭崇業のと大同小異だ。針路記述を見ると、「梅花頭開洋、過白犬嶼。又取東沙嶼。丁上風、用辰巽針八更船、取小琉球山。未上風、乙卯針二更船、取鶏籠。申酉上風、用甲卯針四更船、取彭佳山。亥上風、用乙卯針三更船、未上風、用乙卯針三更船、取花瓶嶼。丁未上風、用乙卯針四更船、取釣魚嶼。丙午上風、用乙卯針四更船、取黄尾嶼。丙上風、用乙卯針七更船、丁上風、用辰巽針一更船、取粘米山。又辰巽針六更船、取土那奇、翁居里山。又辰巽針一更、取馬歯山。直到琉球那覇港、大吉。」(9)一方、「使事紀」には「二十四日黎明開洋、……午過東沙山。……次日過鶏籠嶼、午後過小琉球。……二十六日、過平佳山、花瓶嶼。……二十七日……、午後過釣魚嶼。次日、過黄尾嶼。……二十九日、望見粘米山。……三十日、過土那奇山。……午後、望見琉球山」とあって(10)、島名の表記には若干の食い違い

が見られるが、基本的に「過海図」の針路に合致している。夏子陽の「過海図」は、自らの渡航体験を裏打ちとしているものと見てよい。

明代最後の冊封使を務めた杜三策はなぜか使琉球録を著さなかったが、従客胡靖の『琉球図記』という書物が残っている。『琉球図記』は「琉球図」「琉球記」「中山詩集」の三部構成で、『杜天使冊封琉球真記奇観』という別名を持つ。見聞録である「琉球記」を見ると、風流人らしい詩賦・酒宴・遊覧の話が中心となり、刊行したのも渡琉してから 20 年後で、他の使琉球録とは趣を異にしている。その航程記述によると、「六月四日、従広石解纜、……由五虎門出大海、始掛五帆。乗浪如飛、……八日薄暮過姑米山。……姑米夷官遠望封船、即挙烽聞之馬歯山。馬歯山即挙烽聞之中山。……次日舟到海涯、即那覇港口。」(11)（六月四日、広石を出航し、……五虎門から大海に出て、やっと五本の帆を張った。船は浪を乗り越え、まるで飛んでいるような勢いだった。……八日の夕暮れに姑米山に立ち寄り、……翌日、那覇港に着いた。）景観の描写が多く、尖閣関連の記載は皆無。結局、杜三策一行が尖閣諸島を通過したかどうかは不明である。

一方、清代最初の冊封使を務めた張学礼は、『使琉球紀』『中山紀略』の二冊を著したが、やはり尖閣諸島に関する記載が欠落している。『使琉球紀』では「已離梅花所七日、不見一山。……惟有順流七島。」（梅花所を離れて既に七日経ったが、島影一つも見えない。……このままだとトカラ列島に流れてしまいそうだ）とか、「十五日、……又見一山、如長蛇蜿蜒水中。……云是琉球北山、與日本交界。……問所見小山、云乃尤家埠硫磺山也。」（六月十五日、また島影が現れた。長蛇のように海中に浮かぶ。……聞くと琉球の北山で、日本との境界だという。……見えてきた小島を訊ねると硫黄鳥島だと言う）とか書かれている(12)。どうやら、張学礼らを乗せた封舟も航路から大きく外れてしまい、蕭崇業の時と同様、遂に尖閣諸島を過ることがなかった。

次使の汪楫は、『使琉球雑録』『中山沿革志』『冊封疏鈔』の三書を著し、それまで最も詳しい記録を残した。『使琉球雑録』巻五「神異」篇には、「按海図、過東沙山後、応過小琉球、鶏籠嶼、花瓶嶼諸山。及二十四日天明、見山則彭佳山也。不知諸山何時飛越。辰刻過彭佳山、酉刻過釣魚嶼、船如凌空而行。……二十五日見山。応先黄尾嶼、後赤嶼。無何遂至赤嶼、未見黄尾嶼也。……過赤嶼後、按図応過赤坎嶼、始至姑米山。乃二十六日、倏忽已至馬歯山。回望姑米、横亘来路、而舟中人皆過之不覚。」(13)（海図によると、東沙山を過ぎた後、小琉球、鶏籠嶼、花瓶嶼諸島を過ることになっているが、二十四日の夜明けになり、島影を見ると彭佳山であった。途中の島々は知らぬ間に通過してしまった。午前 8 時頃彭佳山を過り、午後 6 頃釣魚嶼を過った。船はまるで空を飛ぶかのような勢いであった。……二十五日、島が見えた。黄尾嶼は先、赤嶼は後のはずだが、なぜか赤嶼に着いたが、黄尾嶼は遂に見えなかった。……赤嶼を過ぎた後、海図を見ると赤坎嶼を過ぎて、始めて姑米山に至るはずである。二十六日、突然馬歯山に着いていた。振り向くと姑米山は航路の彼方に横たわっており、船内の人々は皆気付かなかった）とあり、幾つかの標識島を見逃したことに戸惑いを隠しきれない。なお巻二「疆域」には、蕭崇業と夏子陽の『使琉球録』の針路、鄭若曾『日本図纂』にある「福建使往日本針路」の抄録があり、これらの文献を参考にしたことは明らかである。

さて、徐葆光の『中山傳信録』と言えば、『中山世鑑』『指南広義』など琉球側の文献も参照して編纂された本格的な琉球研究書として、歴代冊封使録の中の白眉と評される。

巻一「針路」条を飾る「針路図」は、琉球進貢副使を務めた程順則の『指南広義』から「福州往琉球」「琉球帰福州」針路を転載し、「釣魚台」「黄尾嶼」「赤尾嶼」が見える。しかし、自らの渡航記録である「前海行日記」はそれと異なる。「二十二日、……乗潮出五虎門放洋、……二十四日、……当見鶏籠山、花瓶、棉花等嶼及彭家山、皆不見。……二十七日、……天将明、応見釣魚台、黄尾、赤尾等嶼、皆不見。……二十九日、日出、見東北小山六点。陪臣云、此非姑米、乃葉壁山也、在国西北。」(14)（五月二十二日……潮に乗って五虎門を出航、……二十四日、……現れるはずの鶏籠山、花瓶、棉花などの島及び彭家山がすべて現れなかった。……二十七日の夜明け、現れるはずの釣魚台、黄尾嶼、赤尾嶼などの島も現れなかった。……二十九日黎明、東北に小島が六つ見えた。同乗した琉球役人が「これは姑米山ではなく、葉壁山だ！」と言った）。結局、徐葆光一行も蕭崇業や張学礼の時と同様、尖閣諸島を過らず、目睹していないことが分かる。

周煌の『琉球国志略』は十六巻に及ぶ大冊で、恰も琉球百科全書の観を呈している。首巻「図絵」の中に「針路図」が見られるが、徐葆光「針路図」の焼き直しに過ぎない。巻五「山川・針路」条には、『指南広義』の針路記載の他に、陳侃ら歴代冊封使の航海日誌の抄録もある。按語では、自らの航程について「初十日早潮、出五虎門……開洋。……夜、……見鶏籠山頭。十一日……至日入、……見釣魚台。……十二日……見赤洋。……十三日……見姑米山。」と淡々と記しており(15)、他の使琉球録と大差ない。

一方、李鼎元の『使琉球記』は、受命の日から帰朝するまでの出来事を日記風に綴ったのが特徴で、リアリティーに富んだ好作と評される。巻三の渡航日記によると、「初七日、……午刻開洋。……乗潮出五虎門。……初八日……申刻過米糠洋。……夥長云、鶏籠山、花瓶嶼去船遠、不応見。……初九日……卯刻見彭家山。……申正見釣魚台、三峰離立如筆架、皆石骨。……初十日、……辰正見赤尾嶼。嶼方而赤、東西凸而中凹、凹中又有小峰二。……十一日、……午刻見姑米山。……十二日……辰刻過馬歯山。……考歴来針路所見、尚有小琉球、鶏籠山、黄麻嶼、此行倶未見。」(16)（五月七日昼 12 時に出航、潮に乗じて五虎門を出た。……初八日、……午後 4 時頃、米糠洋を通過した。……船長は「鶏籠山も花瓶嶼も船からずっと離れていて、見えないはず」と言う。……九日午前 6 時頃、彭家山が現れた。……午後 4 時に釣魚台が見えた。三つの峰が離れて立っており、筆架のようで、すべて石崖である。……十日午前 8 時に赤尾嶼が見えた。嶼は四角くて赤い。東と西が突出しており、中央が凹んでいる。凹んだ中に更に小峰が二つある。……十一日昼 12 時頃、姑米山が見えた。……十二日午前 8 時頃、馬歯山を通過した。……歴代の針路記録を調べると、他に小琉球、鶏籠山、黄麻嶼もあるはずだが、今回の航海ではすべて現れなかった）と記している。李鼎元一行も汪楫の時と同様、幾つかの標識島を見失ったようだが、尖閣諸島の山容に対する観察と描写は目を引く。

斉鯤、費錫章『続琉球国志略』巻三の「針路」条には「前海行針路記考」があり、夏子陽・汪楫・徐葆光・周煌・李鼎元ら歴代冊封使の航程を概述した上、自らの航程について、「今次封舟、閏五月十一日、早潮出五虎門、過官塘開洋。……十二日……見花瓶嶼。……入夜、……見梅花嶼。十三日天明見釣魚台。……午刻見赤尾嶼。……十五日黎明見姑米山。……至馬歯山。……十六日、……至那覇港外」と簡潔に書き記している(17)。

林鴻年と高人鑑のコンビも使琉球録を残さず、次使趙新は『続琉球国志略』の「針路」条で前任者と自身の航程を併記しているが、島名の表記に大きな変化が見られる。先ず

林高の航程について、「道光十八年五月初四日、五虎門放洋。……初六日、……未刻取釣魚山。申刻取久場島。……初七日黎明、取久米赤島。……初八日黎明、西見姑米島。申刻見馬歯山。……初九日辰刻、進那覇港」と記した後、自らの航程について、「同治五年六月初九日卯刻、放洋。……十一日……酉刻過釣魚山。戌刻過久場島。……十二日、……未刻過久米赤島。……十五日……辰刻見姑米山」と書いている(18)。いずれも「黄尾嶼」「赤尾嶼」など慣用されてきた中国名を使わず、わざわざ琉球固有の名称である「久場島」（クバシマ）「久米赤島」（クミアカシマ）を使用したことに注目したい。「名は其の実を表す」という中台側の好む理屈に従って言えば、清朝最終回の冊封使に至って、遂に久場島と大正島が琉球領であることを認めたということになろう。

ともあれ使琉球録 12 種のうち、尖閣通過記録があるのは 8 種、ないのは 4 種に上る。「過海図」「針路図」を載せた使琉球録も 4 種あるが、「釣魚嶼は中国領」と記したものは一つもない。また、琉球領の境界を巡って陳侃と郭汝霖の認識が食い違い、他の者は特に触れていない。さらに、「黄尾嶼」「赤尾嶼」といった古名を改め、「久場島」「久米赤島」と表記した趙新の書を最後に、尖閣関連の記録は中国史籍から途絶えてしまった。こうした事実は、尖閣諸島に対し、明清冊封使たちが「領土」「領海」などの意識を持たず、単に渡琉航路の目印として記載したに過ぎぬという仮説を立証している。

三、琉球船員の反応と役割

ところで、帆船時代において、冊封使たちの船旅は正しく命がけの大冒険で、それを陰で支えたのは琉球国から派遣された役人と船乗りだった。しかし、封舟に同乗していた琉球出身者の存在について、中台の論客はよりによって御都合主義の質を曝け出す。彼らは、「古米山が現れると琉球船員が大喜びした」という意味の史料を引っ張り出して、「琉球領は久米島からだ」と言い張る半面、封舟の水先案内役を果たした琉球出身者の役割については黙殺し続けるのである。

琉球船員の記載は最初、陳侃『使琉球録』の「使事紀略」に登場する。「十一日夕、見古米山、乃属琉球者。夷人鼓舞于舟、喜達于家。」(19)（十一日夕方、久米島が見えてきた。すなわち琉球領だ。琉球の人たちは封舟で小太鼓を打ちたり踊ったりして、我が家に帰れることを喜んだ。）似たような記述が他の使録にも散見され、枚挙に暇がない。

蕭崇業『使琉球録』の「使事紀」には、「三十日、余令夷稍上桅以覘、輒欣然白曰、雲間隆々起者、非古米即葉壁山也。去此可五六百里許、當無慮已。於是舟中人無不拍手大歓、各排愁破慮、挙觴相慰労、称見山酒云。余二人望之、亦舞於眉端。」(20)（五月三十日、私は琉球船員に帆柱に登って様子を観察させようと命じた。暫くして、彼が嬉しそうにこう言った。「雲の間に、にょっきりと突っ立っているのは久米島でなければ、伊平屋島に違いない。ここから五、六百里ほどの距離で、もう大丈夫だ！」と。そこで、船の連中は皆手を打って大喜びした。それぞれが心配を捨てて盃を挙げ、互いに労をねぎらい合った。見山酒と呼んだ。私共二人も舞い上がってしまった）という。

夏子陽『使琉球録』の「使事紀」にも類似する記録が見られる。「二十九日、望見粘米山。夷人喜甚、以為漸達其家。……是日、舟人喜溢眉端。」(21)（五月二十九日に久米島が現れてきた。琉球の人たちは大喜びし、いよいよ我が家へ帰れると思ったからだ。）

張学礼『使琉球紀』には、「十五日、……差王大夫鄭通使上山探問、云是琉球北山、與

日本交界。挙舟歓抃。……痛定追思、喜逾望外。」(22)（六月十五日、……琉球国大夫の鄭通使を差し向け、島に上がって様子を調べさせた。彼は「この島は琉球の北山で、日本との境界です」と報告すると、船の人たちは皆歓声を挙げた）とある。

李鼎元『使琉球記』巻三には、「十一日……午刻見姑米山。……舟中人歓声沸海。……十二日、……取那覇港、……共相慶幸。」(23)（十一日昼 12 時頃、久米島が見えてきた。……船内の人々の歓声に海が湧きあがるばかりだった）と記している。

これらの史料に対し、「琉球船員が釣魚島を通過した際に何の反応も示さず、久米島が見えた途端に大喜びしたということは、釣魚島は中国領、久米島は自分の国だと知っていたから」と解釈するのは強引すぎる。琉球船員の中に久米島出身者が多く、九死に一生を得た航海が終わりに近づき、家族の住む島が見えてきた時の喜びは、いわば人情の発露で、「領土」「国境」とは無関係のはずだ。況や蕭崇業、夏子陽、李鼎元らの言う「舟人」「舟中人」の反応は、何も琉球船員に限った話ではなく、中国人乗組員も含めて封舟に乗り込んだ「運命共同体」全員の素直な心情を表している。「当是時、舟人望山之切、真不啻朝飢之匄粱穀、又如弱孺思慈媼而弗得親也。」(24)（この時は、船員たちが島影を求めて切なること、まことに朝の空腹時に飯の匂いを嗅ぎ、赤ん坊が母を慕っても親がいないかのようであった）、「此数日、舟人望山之切、誠不啻飢者之於飲食、嬰児之於慕慈母也。」(25)（ここ数日、船員たちは島影の現れるのを待つこと切なるものがあり、飢えた者が飲食を求め、赤ん坊が母親を慕うかのようだった）といった蕭崇業や夏子陽の述懐からも当事者の心情の一端が窺えよう。

実は、帰航途中の中国人船員の反応に関する記述の方が遥かに多く、中台の論客が決して触れようとしないが、琉球船員以上に凄まじいものがあった。福建－琉球航路では、復路は強い東北風を利用するため、往路より遭難の確率が高く、封舟の殆どが帰りで暴風雨や荒波に見舞われた。陳侃の時、沈没寸前になった船の中で守護神天妃に祈りを捧げた後、暫くして、「風若少緩、舟行如飛。徹暁、已見閩之山矣。舟人皆踊躍鼓舞、以為再生。」(26)（風は少し凪いできて、船はまるで飛ぶようであった。翌日の曙に福建の島々が見えてきた。船の人は皆躍り上がって、生きて帰れたことを喜んだ。）

郭汝霖の場合も同じである。「行之至二十六、許厳等来報曰、漸有清水、中国山将可望乎。二十七日、果見寧波山。……二十九日、忽至福寧、見定海台山、心始安焉。」(27)（十月二十六日、船員の許厳らが報告に来た。「いよいよ清水に入り、中国の島はそろそろ現れるだろう」と。二十七日になって、果して寧波の島が見えた。……二十九日、忽ち福寧に至り、定海の台山が見えてきて、やっと安心した。）

蕭崇業の表現は面白い。「二十九日晩、見台州山。於是無不譁呼舞蹈、閧然色咲焉。當是時、即臞儒之取一第、妻子之拾千金、猶未喩其喜也。」(28)（十月二十九日夜、台州の島が現れた。みな大声を挙げ踊り大騒ぎした。痩せた儒生が科挙試験のトップ合格を果たし、落ちぶれた乞食が千金を拾ったとしても、この時の喜びには及ばないだろう。）

夏子陽の記述には当事者ならではの感慨が込められている。「……次日黎明、果見福寧州山。……挙舟懽呼雷動、咸謂今日乃得生矣。」(29)（翌日の明け方に、果たして福寧州の島が現れた。……船の人は皆喜びの声を挙げ、雷鳴のように叫んだ。「今日、やっと命拾いをした」と。）

胡靖の描写も生き生きとしている。「黎明、満船喊声如雷震、余驚為舟破人呼。督造官

曰、望見中国之山、是衆人踴躍歓声耳。少頃霧開、見数漁艇隠顕目前、為鎮海口、即前由出海之所是也。……天使呼巨觴、互相慶曰、得及第不若望見此山。喜悦之心、洵匪言喩。」(30)（明け方になった頃、船は喊声でいっぱいになり、まるで雷鳴のようだ。私は舟が破壊したから、人々が叫んでいるのかと思った。監督官は「中国の島々が現れて、人々が躍り上がって喜んでいる」と言った。暫くして霧が晴れると、多くの漁船が目の前に見え隠れしていた。鎮海口、つまり渡航時に出帆した所だった。……冊封使は大きい盃を挙げ、互いに祝い合った。「たとえ科挙試験のトップ合格を果たした時でも、この島が現れるのを見た時の喜びに及ばない」と。誠に言葉に言い表せないものだった。）

李鼎元一行の帰途では、「二十九日、……風微、大霧、針如故。巳刻稍霽、見温州南杞山、舟人大喜。少頃、見北杞山、有船数十隻泊焉。」(31)（十月二十九日、……微風、濃霧、針路は元のまま。午前 10 時頃、やや晴れてきて、温州の南杞山が現れた。船員たちは大喜びした。暫くして北杞山も見えてきた。数十隻の船が停泊していた）という。

このように、中国人船員も往路で釣魚島を通過した際に無反応で、帰路で「閩之山」「寧波山」「台州山」「福寧山」「南杞山」といった中国沿岸の島々が現れると、「中国の島だ！」と大喜びし、生きて故郷に帰ってきたとの実感が湧き上がったのである。故郷の島や海岸が見えてきた瞬間、苦難に満ちた船旅がいよいよ終わり、九死に一生を得た万感がこみ上げるのは中国人も琉球人も変わらない。琉球人船員の反応だけ取り上げて拡大解釈する半面、中国人船員が示した同様の反応を不問に付すのは極めて不公正だ。

そもそも、琉球船員の反応について云々する前、「なぜ封舟には琉球出身者が同乗していたのか」という疑問に先ず答えるべきだ。冊封使本人はもとより航海術の素人で、随員や船員の殆ども琉球渡航は初体験である。出発前、海道針経やら使琉球録やら渉猟しただろうが、いざ大海原に出ると、東も西も分からぬ窮地に陥るに違いない。そこで、毎回冊封使の派遣が決まると、必ず琉球国王から冊封使を迎えるための役人や船員が福州に派遣されるのである。冊封使が帰航する際も、彼らがまた福州まで護送する。接封大夫・長史などの肩書を持つ琉球役人はさておき、船乗りたちは夥長（羅針盤係）・看針通事（通訳兼針路係）・執舵（舵取り）・鴉班（マスト要員）などとして大活躍する。

陳侃は冊封使に任命されると、直ちに福州に赴き、渡航の準備に取り掛かったが、地元の船乗りたちが琉球行きの海路に不案内であることを知り、深く不安に陥った。その時、「是月、琉球国進貢船至、予等聞之喜。閩人不諳海道、方切憂之、喜其来、得詢其詳。翼日、又報琉球国船至、乃世子遣長史蔡廷美来迓予等。則又喜其不必詢諸貢者、而有為之前駆者矣。長史進見、道世子遣問外、又道世子亦慮閩人不善操舟、遣看針通事一員、率夷稍善駕舟者三十人代為之役。則又喜其不必藉諸前駆、而有同舟共済者矣。」(32)（この月、琉球国の進貢船が到着した。それを聞き、嬉しく思った。福建の人は琉球への航路に疎いので、ちょうどそのことを思い悩んでいたのであった。お蔭で航路の詳細を訊ねることができる。翌日、また琉球国の船が到着したとの知らせが入った。それは、世子が長史の蔡廷美を迎えによこしたのである。私たちは更に嬉しかった。航路の詳しいことを朝貢の使節に訊ねなくとも、案内をしてくれるものができたからである。長史は謁見の折、世子からの挨拶を伝えた後、またこんなことを言った。「世子も福建の人が船の操縦が十分ではないことを心配して、看針通事一人に、ベテランな船員三十人を引率させて派遣し、福建人船員の代わりに航海の仕事をさせることにした」と。これま

た嬉しいことであった。案内をしてくれる者に頼らなくとも、呉越同舟ができるからだ。）陳侃の告白は、琉球船員頼みの実情と自らの期待感を如実に言い表している。

帰国後に提出した上奏文において、陳侃は「先期、尚清已遣長史蔡廷美等過海迎接、令通事林盛帯夷稍三十人為臣等駕舡」と述べた上、「臣等初被命時、……至於往来之海道、交祭之礼儀、皆無従詢問。特令人至前使臣家、詢其所以、亦各凋喪而不之知。後海道往来、皆頼夷人為之用。」(33)（臣らが初めて勅令を蒙った時、……往復の航路や交際時の礼儀に至っては、全く訊ねようがなかった。そこで、前使節の家へ人を差し向けて訊ねさせたが、相手の方々も老い呆けて、一向要領を得られなかった。その後、往復航海のことはすべて琉球の人々に任せることにした）と報告している。

実際には航海中、冊封使が琉球船員に航路を訊ねる、また彼らの力を借りて遭難を切り抜けることが多かった。陳侃一行の往路で、「遠見一山顛微露、若有小山伏於其旁。詢之夷人、乃曰此熟壁山也。亦本国所属、但過本国三百里。至此可以無憂。若更従而東、即日本矣。」(34)（遠く島影が一つ、微かに現れた。その近くに小さい島も横たわっているようだ。琉球の人に訊ねると、「伊平屋島です。この島も我が国の領土ですが、本国から三百里も離れています。ここへ着けば、もう心配はない。このまま東へ行くと日本です」と教えてくれた。）『殊域周諮録』巻四「琉球」に転載された陳侃の「使事紀略」を読むと、「十一日至夕、始見古米山、問知琉球境内」と記しているので(35)、陳侃ら冊封使が釣魚嶼の位置を確認できたのも、琉球船員に教わった公算が極めて大きい。

郭汝霖一行が復路で嵐に見舞われた最中、「牽舵大纜……又忽中断。……舵工等又懼舵不能穏、稍擺動、金口開、船分両片矣。此尤危也。乃用銀重賞一夷人、係其腰、令之下海接之。」(36)（突然、舵を牽引しているロープが切れてしまった。……舵取りたちはまた、舵が落ち着いていないと、金具が揺り動かし、船が真っ二つになるかと恐れた。正に絶体絶命。そこで、銀貨を出して賞金にし、一人の琉球船員の腰に縄をつけて、海中に潜り、纜を連結させようとした）という危機一髪の場面もあった。

李鼎元の記述はまた具体的である。「初七日、……乗潮出五虎門。……入夜、接封大夫梁煥率其国夥長二人主針、目不転瞬、與舵工相依為命。……問知琉球夥長、年已六十、往来海面八次、毎度細審得其準的。……據琉球夥長云、海上行舟、風小固不能駛、風過大亦不能駛。風大則浪大、浪大力能壅船、進尺仍退二寸。惟風七分、浪五分、最宜駕駛、此次是也。従来渡海、未有平穏而駛如此者。」(37)（五月七日、潮に乗って五虎門を出た。……夜に入り、接封大夫の梁煥は琉球夥長の二人を指揮して羅針盤を担当し、じっと目を凝らして、舵取りとぴったり息があっている。……琉球夥長に訊ねたところ、彼は年齢六十、この海域を往来すること八回、その度に詳しく観察し、水先案内を会得しているという。……彼が言うには、「海上の航行は風が弱ければ航行不能となるが、風が強すぎてもできない。風が強すぎると波が高く、波が高ければその力が船の前進の妨げになる。一尺進んで二寸退くことになる。風が七分に波が五分といったところが最も航行に適している。今回はこれであった。今までの航海のうち、これだけ平穏で、これだけ速かったことはない」と。）

そこまで琉球船員に頼らざるを得ないのは、優秀な福建船員の確保が難しいという事情があったからである。夏子陽の話によると、「篙工、舵師、旧録皆用漳人。……但精能者往々為海商私匿。……夥長、……舵工、……此二役、船中関係甚重、誠不可不慎擇

者。唯是此輩多楽於商船、而不楽於随封。蓋商船募資厚而獲利倍、官府則僅僅工食六両余耳。況一経籍名、数年不得出海、既苦守候之難、而官船帯貨有限、且又禁其貿易、不免折資之怨。此精良者所以匿不肯応。即官府厳拘之、亦徒得其贋者耳、其孰従而辨之。」(38)（旧使録によると、篙工、舵師は漳洲出身者を採用すべきだという。……だが、優秀な船員は往々にして海商が自分のために隠匿する。……夥長……舵工、……この二役は、最も重要な役目で、採用するには慎重でなければならない。しかし、彼らの多くは商船を希望し、封舟に随行することを嫌がる。商船は待遇が良く、収入が倍になるからだ。官府は賃金が僅か六両に過ぎない。しかも、一旦名簿に登録されると、数年の間、海に出ることができず、ずっと待機し続けなければならない。また、封舟は持ち渡り貨物に制限があり、琉球での商売も禁止されているので、割に合わないと怨まれる。これは優秀な船乗りが隠れて応募しない理由だ。たとえ役所が厳しくこれを拘禁すれば、徒に贋者を掴まれるだけで、どうやって見分けることができるのだろうか。）

陳侃の相棒を務めた高澄の『操舟記』には、船員募集の苦労話が延々と綴られている。蕭崇業の相棒謝傑も、『琉球録撮要補遺・用人』の中で自らの経験を披露した後、次のような結論を下した。「大都海為危道、郷導各有其人。看鍼把舵過洋、須用漳人。……至夷熟其道者、又須用夷人。夷王遣夷稍三十人来接、正為此也。」(39)（航海は危険なので、水先を案内するには、それぞれに適した人が欠かせない。羅針盤を見、舵を操作して渡航するには漳洲の人を使うのがよいが、……琉球航路について言えば、その航路に習熟している琉球の人を使うべきだ。琉球国王が船員三十名を遣わして迎えに来させたのも、このためである。）以上の史料からは、福建－琉球航路及び尖閣諸島に関して、琉球船員の方が中国人船員より熟知していたことが読み取れる。

四、「黒水溝」「中外之界」の虚実

さて、使琉球録には「黒水溝」「過溝」「米糠洋」「中外之界」といった字句が散見され、中琉の間に広がる海域の境目を意味する言葉として受け取られる節がある。中台の論客は、赤尾嶼と久米島の間を流れる「黒水溝」こそ、中国領と琉球領の境界線に当たり、その西側にある「釣魚嶼」「黄尾嶼」「赤尾嶼」といった島々は当時、すでに中国の領土として認識されていたとの主張を散布してきたが、「歴史的事実の歪曲」以外の何物でもない。

先ず、関連史料を列挙しておこう。謝傑『琉球録撮要補遺・啓行』には「惟封船自西徂東、自東還西、乃衝横浪萬余里。去由滄水入黒水、帰由黒水入滄水。」(40)（封舟は西から東へ行き、東から西へ帰るので、万里の海流を横断しなければならない。行きは滄水から黒水に入り、帰りは黒水から滄水に入る）とあって、漠然と黒水溝の存在に言及している。夏子陽はそれを踏まえ、「二十七日……午後過釣魚嶼。次日過黄尾嶼。是夜、風急浪狂、舵牙連折。連日所過水皆深黒色、宛如濁溝積水、或又如靛色。憶前使録補遺称、去由滄水入黒水、信哉言矣。二十九日、望見粘米山。」(41)（二十七日午後、釣魚嶼を通過した。翌日、黄尾嶼を過った。この夜、風が激しく浪は荒れ、舵柄が続けて折れた。連日通過してきた海はすべて深黒色で、さながら濁った溝に水が溢れているようで、また藍色であった。前使録『補遺』に「行きは滄水から黒水に入る」と書いているのを覚えており、誠にその通りである。二十九日に粘米山が現れてきた）と具体的に記し、「黄尾嶼」と「粘米山」の間にあるとして黒水溝の位置を特定した。

周煌『琉球国志略』巻五の「山川・海・潮候、風信、針路附」を見ると、「環島皆海也。海面西距黒水溝、與閩海界。福建開洋至琉球、必経滄水、過黒水。古称滄溟、……又曰東溟。」(42)（琉球は海に囲まれており、海は西に黒水溝を隔てて閩海と界している。福建から琉球へ渡るには必ず滄水を経て黒水を過る。古「滄溟」と呼ぶが、「東溟」とも言う）と概説した上、自身の航程について、往路では「十二日、……見赤洋。……是夜、過溝、祭海。十三日、……見姑米山」、復路では「初四日……午時過姑米山、……初五日、……夜、……過溝、祭海」と記している(43)。ところが、巻首を飾る「針路図」と照合すると、上方の往路では「黄尾嶼」と「赤尾嶼」の間に「又単乙針九更過溝」、下方の復路では「又辛針六更過溝」と書き込まれている(44)。つまり周煌の場合、「黒水溝」の位置が曖昧で、「赤洋」と「姑米山」の間、「黄尾嶼」と「赤尾嶼」の間という二か所にある。

「過溝」「祭海」に関する史料として、汪楫『使琉球雑録』巻五「神異」篇の記述がよく使われる。「二十五日、見山。……無何遂至赤嶼、未見黄尾嶼也。薄暮過郊（或作溝）。風涛大作、投生猪羊各一、溲五斗米粥、焚紙船。……久之始息。問郊之義何取？曰中外之界也。界於何辨？曰懸揣耳。然頃者恰当其処、非臆度也。」(45)（二十五日、島が見えてきた。……赤嶼には着いたのであるが、なぜか黄尾嶼はまだ見えない。夕暮れ、郊〔もしくは溝とも書く〕を過った。風と波が激しく、生きた豚と羊を一匹ずつ投げ入れ、五斗の米粥を注ぎ込んで、紙の船を焚いた。……暫くして、やっと風と波は止んだ。船員に「郊って、どういう意味か」と訊ねたところ、「中外の界だ」とのこと。「何によって区別するか」と聞くと、「推量するだけだが、今回はちょうどその処に相当しており、臆測ではない」と。）すなわち、汪楫が「赤嶼」と「姑米山」の間で「過溝」を体験したことが分かる。

全魁の従客として琉球へ渡航した王文治が詩集『海天游草』を著し、「黒水之溝深似墨、……方知中外有分疆」(黒水の溝深くして墨にかも似る……今知りぬ中外に境を分かつこと）という渡海吟を詠んだが、場所は判然としない(46)。一方、斉鯤、費錫章『続琉球国志略』巻三「針路」を見ると、「前海行針路記考」には「十三日天明、見釣魚台。……午刻見赤尾嶼、又行船四更五、過溝、祭海。……過釣魚台後、用卯、多須防落漈」とあり、また「後海行針路記」には、「九日、由馬歯開洋。……戌刻過姑米山。……十一日……入暮、過溝、祭海」と記し(47)、やはり「赤尾嶼」と「姑米山」の間としている。

このように、「黒水溝」「過溝」「中外之界」の位置・場所を巡って、冊封使たちの認識にずれがあり、名称も紛らわしい。張学礼『使琉球紀』には、「初七日、……出海口。……初九日、浪急風猛烈、……水色有異、深青如藍。舟子曰入大洋矣。頃之、有白水一線、横亘南北。舟子曰過分水洋矣。此天之所以界中外者。……十二日過糠洋。風恬浪静、天水若一。日出則海水皆紅。」(48)（六月七日、……海口から出航。……九日、波は激しく風は強い。……海水の色は変わってきて、藍のように深い青色であった。船員は「大洋に入った」と言った。暫くして白い潮の一線が南北に横たわっていた。船員は「分水洋を過ぎた。これは天がその内と外を境しているためなのだ」と言った。……十二日、糠洋を過った。風は安らかで波は静まり、空と海がまるで一つのようだ。日が昇ると海水はすべて赤くなった）と記している。ここの「大洋」「分水洋」「糠洋」とは、いずれも台湾海峡を指していると思われるが、張学礼の認識として、台湾海峡が「界中外者」となるわけである。

一方、徐葆光『中山傳信録』巻一「前海行日記」では、往路で「二十二日、……乗潮出五虎門、放洋。二十三日、……約離官塘八更許。二十四日、……過米糠洋（海水碧徹如靛、

細黄沙如涎沫、連亘水面如米糠)。……當見鶏籠山、花瓶、棉花等嶼及彭家山、皆不見。」(49)（二十二日、潮に乗って五虎門を出航した。二十三日、官塘を大分離れた。二十四日、米糠洋〔海水は碧色透明で藍のようである。細かい黄砂が涎のように連なり、水面に広がって米糠のようである〕を過った。……鶏籠山、花瓶、棉花及び彭家山など現れるはずの島々が遂に現れなかった)。ここの「米糠洋」は、張学礼の言う「糠洋」に当たり、福建近海の島・官塘と台湾の北にある島嶼の間に位置しており、紛れもなく台湾海峡を指している。また、復路の「後海行日記」には「二月十六日巳刻、封舟自琉球那覇開洋。……過馬歯、安根呢、度那奇等山、海水滄黒色。……二十日、……是日、海水見緑色。夜過溝、祭海神」とあり(50)、徐葆光は「米糠洋」と「過溝」の両方を経験したのである。

李鼎元の観察は一味違う。五月七日に出航し、「初八日、……申刻、過米糠洋。璇皆圓、波浪密而細、如初篩之米、点々零落。米糠字、極有形容。……初九日、……申正見釣魚台。……入夜……舟人禀祭黒水溝。按汪舟次雑録、過黒水溝、投生羊豕以祭、且威以兵。今開洋已三日、莫知溝所。琉球夥長云、伊等往来、不知有黒溝。但望見釣魚台、即酬神以祭海。随令投生羊豕、焚帛、奠酒以祭、無所用兵。」(51)（八日午後 4 時頃、米糠洋を通過した。水玉は皆円く、波は密で細かく、最初に篩にかけた米のように、点々とこぼれており、「米糠」の字はぴったりとした形容である。……九日、……午後 4 時に釣魚台が現れた。……夜、船員が黒水溝を祭ることを上申した。汪楫『雑録』によると、黒水溝を過る時、生きた羊豚を海に投じ、祭りをして、兵に武器を持って海に向かって威嚇させることが書かれている。出航して三日経つが、溝のある場所が分からない。琉球の夥長が言うには、「私らはこの航路を何回も往復してきたが、黒水溝など知らない。釣魚台が見えてきたら、神にお供えをして海を祭る」と。なので、生きた羊と豚を投げ込んで、帛を焚き酒を供えて祭るよう命じた。兵器を用いなかった）すなわち、李鼎元一行は釣魚台の一歩手前で「過溝」儀式を済ませたのだが、釣魚台と赤尾嶼が百キロ以上も離れている。一方、帰路では、「二十五日、……決令開帆。……酉刻過姑米山。……視海面深黒、天水遥接、豈即所謂黒溝邪」という(52)。不思議なことに、「黒水溝」はまた久米島附近に「移動」したのである。

では、「黒水溝」の正体は一体何だろうか。『元史』巻二百十「瑠求」には、「瑠求」の近くに「落漈」があり、ここに船が漂流すると必ず沈む難所として記されている。「瑠求」とは台湾を指しているとすれば、「落漈」「黒水溝」は黒潮と考えられよう。黒潮の本流は藍黒色で、幅は約百キロ、フィリピン群島の東岸から台湾の東側、琉球群島の西側を通って日本列島の南岸を流れ、太平洋の中央部に向かうが、台湾島の南端で分かれ、台湾海峡を北上する支流も形成された。事実、台湾地方志の中に「黒水溝」の記述が多い。例えば 1698 年 2 月に厦門から台湾へ渡った郁永河が著した見聞録『裨海紀遊』には、「二十二日平旦、渡黒水溝。台湾海道、惟黒水溝最険。自北流南、不知源出何所。海水正碧、溝水独黒如墨、勢又稍窳、故謂之溝」とある(53)。その他、孫元衡『赤嵌集』（1710）・黄叔璥『台海使槎録』（1722）・範咸『重修台湾府志』（1747）・余文儀『続修台湾府志』（1778）・周于仁『澎湖志略』（1740）・胡建偉『澎湖紀略』（1766）においても見られる。「黒水溝＝国境」と固執するなら、台湾海峡も国境となり、台湾は中国の「固有領土」でなくなるのだ。

実は、陳侃、夏子陽、李鼎元らが自身の体験及び琉球での聞き取り調査に基づき、「落漈」「黒水溝」の存在すら否定した。陳侃は上奏文の中で、「『大明一統志』……所云落漈者、水趨下不回也。舟漂落漈、百無一回。臣等嘗懼乎此、経過不遇是険、自以為大幸。至其国

而詢之、皆不知有其水、則是無落漈可知矣。」(54)（『大明一統志』は「落漈」のことを載せており、「水が下方に流れて回らない。舟は一旦落漈に漂流してしまうと、百に一も戻れない」という。臣らはここを通過することを恐れていたが、この危険に遭遇したことがなく、偶々運が良かったと思い込んでいた。琉球に着いた後、現地の人に訊ねると、誰もそれを知らない。もともと落漈がないということが分かった）と証言している。

李鼎元の場合、「酒酣、有客曰、聞海面西距黒水溝、與閩海界。古称滄溟、亦曰東溟。球人不知、此行亦未之過、何也。余曰、渡海者多、著書者少。登舟不嘔、日坐将台親書其所見者尤少。率一人倡之、衆人和之。耳食之談、何可盡信。球人歳一渡海而不知黒溝、則即謂無黒溝也可。」(55)（宴たけなわ、従客の一人が聞いてきた。「海は西に黒水溝を隔てて閩海と界されていると聞いている。昔は滄溟とも東溟とも呼ばれたが、琉球の人は知らないし、今回の渡航でも通過しなかった。どうしてだろう」と。私はこう答えた。「渡海する者は多いが、本を書く人は少ない。乗船しても船酔いをせず、毎日指揮室に座って自らの見聞を書き留めた者はもっと稀だ。一人が何かを言うと、他の人は皆同じことを言うのだが、所詮耳学問なので、真に受けることができまい。琉球の人は毎年渡航していても、黒水溝のことを知らないならば、黒水溝が存在しないということなのだ。」）ちなみに、彼の『師竹斎集』には「琉人罔識黒溝名、祭海唯看赤尾横」という航海詞が見られる(56)。

それより、冊封使の詩文に散りばめられた「閩山」「漢疆」「中華界」などの字句を丹念に拾い上げると、彼らの領土認識が自ずと浮かび上がってくるのだ。「過東沙山」と題する詩句が多い中、「過東沙山是閩山盡処」という汪楫『観海集』の一句に注目したい(57)。これは「東沙山を過ぎると、福建の島々が尽きるところだ」を意味している。胡靖『中山詩集』の「広石揚帆」には「此日維揚出漢疆」（本日、帆を揚げて漢疆を出る）、「舟経五虎分殊域」（封舟、五虎門を経て異域を分ける）と詠まれ(58)、斉鯤『東瀛百詠』にある「鶏籠山　猶是中華界」「鶏籠山過中華界」など「航海八詠」の詩句も証左の一つである(59)。すなわち、「東沙山」「広石」「五虎門」「鶏籠山」（いずれも福建・台湾沿岸の島、港）を過ぎると、もはや「閩山」「漢疆」「中華界」でなくなり、「殊域」（異域）に入るという感覚だ。

帰航の記録はもっと単純明快である。「行之至二十六、許厳等来報曰、漸有清水、中国山将可望乎。二十七日、果見寧波山」（郭汝霖）(60)、「二十九日早、隠隠望見一船、衆喜謂有船則去中国不遠。且水離黒入滄、必是中国之界。……次日黎明、果見福寧州山」（夏子陽）(61)、「督造官曰、望見中国之山、是衆人踴躍歓声耳。少頃……見数漁艇隠顕目前、為鎮海口、即前由出海之所是也」（胡靖）(62)、「二十二日、海水漸渾、中国相近。……二十三日、舟子曰是浙江之定海」（張学礼）(63)、「十八日、……辰刻見中華外山、未刻見南杞山」（趙新）等々(64)。ここで言う「中国山」「中国之界」「中華外山」とは、「寧波山」「福寧州山」「鎮海口」「南杞山」といった中国沿岸の島を指しているのは、火を見るよりも明らかだ。

おわりに

以上の史料検証を通じて明清冊封使の渡琉事情とともに、福建－琉球航路の実相を知ることもできる。使琉球録において、「釣魚嶼」「黄尾嶼」「赤尾嶼」といった島があくまで航海の目印として記載されていることは、徐葆光らの記述を見れば一目瞭然だ。「船行海中、全以山為準。福州往琉球、出五虎門、必取鶏籠、彭家等山。……自鶏籠山東行、釣魚嶼、赤尾嶼以至姑米山諸山皆在南、借為標準、倶従山北邊過船。見山、則針正。応見不見、則

針已下漸東北行、必至見葉壁山矣」(65)（航海中、すべて島を目印とする。福州から琉球へ渡るには、五虎門を出て必ず鶏籠、彭家などの島を経由する。……鶏籠山から東へ行くと、釣魚嶼や赤尾嶼を経て姑米山までの諸島は皆南にあり、それを標識に島の北側を過る。島が現れれば針路は正しい。現れるはずなのに現れなければ、針路は段々東北へ偏ったことが分かる。ゆくゆくは伊平屋島に辿り着くだろう。）ともあれ、中台側の主張は悉く使琉球録の記述を無視した虚構であり、これを以て領有の根拠とすることはできない。

注

(1)使琉球録の書誌学的な考察は、夫馬進編『増訂使琉球録解題及び研究』（榕樹書林、1999 年）に譲る。
(2)原田禹雄訳注『陳侃　使琉球録』榕樹社、1995 年、166～167 頁。史料の邦訳は原田氏の訳文を参照。
(3)同上、209 頁。後に夏子陽は「彭湖非其所属」と訂正した（後掲夏子陽・王士禎『使琉球録』、185 頁）。
(4)郭汝霖『重編使琉球録』、殷夢霞『国家図書館蔵琉球資料続編』上、北京図書館出版社 2002 年、51 頁。
(5)郭汝霖『石泉山房文集』巻七、王函選編『国家図書館蔵琉球資料三編』上、北京図書館出版社、2006 年、17 頁。石井望氏の研究成果（2012 年 7 月 17 日付『産経新聞』記事）を参照。
(6)蕭崇業・謝傑共撰『使琉球録　附皇華唱和詩』台湾学生書局、1977 年、11～17 頁。
(7)同上、77～80 頁。
(8)同上、232 頁。
(9)夏子陽・王士禎撰『使琉球録』台湾学生書局、1969 年、22～32 頁。
(10)同上、104～107 頁。
(11)胡靖『琉球記』、黄潤華『国家図書館蔵琉球資料匯編』上、北京図書館出版社 2000 年、262～264 頁。
(12)張学礼『使琉球紀・中山紀略』、同上黄潤華、薛英編『国家図書館蔵琉球資料匯編』上、649～650 頁。
(13)汪楫『使琉球雑録』、同上『国家図書館蔵琉球資料匯編』上、800～802 頁。
(14)徐葆光『中山傳信録』（第一冊）台湾文献叢刊第 306 種、台湾銀行経済研究室編印 1972 年 13～14 頁。
(15)周煌『琉球国志略』（第一冊）台湾文献叢刊第 293 種、台湾銀行経済研究室編印、1971 年、145 頁。
(16)原田禹雄訳注『李鼎元　使琉球記』榕樹書林、2007 年、536～538 頁。
(17)斉鯤・費錫章『続琉球国志略』、前掲殷夢霞など編『国家図書館蔵琉球資料続編』上、490～492 頁。
(18)趙新『続琉球国志略』、前掲黄潤華、薛英編『国家図書館蔵琉球資料匯編』下、251～254 頁。
(19)前掲、原田禹雄訳注『陳侃　使琉球録』、167 頁。
(20)前掲、蕭崇業・謝傑共撰『使琉球録　附皇華唱和詩』、78～79 頁。
(21)前掲、夏子陽・王士禎撰『使琉球録』、106～107 頁。
(22)前掲、張学礼『使琉球紀・中山紀略』、650 頁。
(23)前掲、原田禹雄訳注『李鼎元　使琉球記』、538 頁。
(24)前掲、蕭崇業・謝傑共撰『使琉球録　附皇華唱和詩』、78 頁。
(25)前掲、夏子陽・王士禎撰『使琉球録』、116～117 頁。
(26)前掲、原田禹雄訳注『陳侃　使琉球録』、195 頁。
(27)前掲、郭汝霖『重編使琉球録』、58～59 頁。
(28)前掲、蕭崇業・謝傑共撰『使琉球録　附皇華唱和詩』、85 頁。
(29)前掲、夏子陽・王士禎撰『使琉球録』、118 頁。

(30)前掲、胡靖『琉球記』、289～290 頁。
(31)前掲、原田禹雄訳注『李鼎元　使琉球記』、581 頁。
(32)前掲、原田禹雄訳注『陳侃　使琉球録』、160 頁。
(33)同上、252 頁、274～275 頁。
(34)同上、171 頁。
(35)厳従簡著、余思黎点校『殊域周諮録』中華書局、2009 年、142 頁。
(36)前掲、郭汝霖『重編使琉球録』、58 頁。
(37)前掲、原田禹雄訳注『李鼎元　使琉球記』、536～538 頁。
(38)前掲、夏子陽・王士禎撰『使琉球録』、159～161 頁。
(39)同上、261 頁。
(40)同上、265 頁。
(41)同上、106 頁。
(42)前掲、周煌『琉球国志略』（第一冊）台湾文献叢刊第 293 種、134 頁。
(43)同上、145 頁、147 頁。
(44)同上、33 頁。
(45)前掲、汪楫『使琉球雑録』、801～802 頁。
(46)王文治『海天游草』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、550 頁。
(47)前掲、斉鯤・費錫章『続琉球国志略』、491～499 頁。巻三「霊蹟」に「十二日過黒水洋」と（510 頁）。
(48)前掲、張学礼『使琉球紀・中山紀略』、648～649 頁。
(49)前掲、徐葆光『中山傳信録』（第一冊）台湾文献叢刊第 306 種、13 頁。
(50)同上、16～17 頁。
(51)前掲、原田禹雄訳注『李鼎元　使琉球記』、537 頁。
(52)同上、581 頁。
(53)郁永河『裨海紀遊』台湾文献叢刊第 44 種、台湾銀行経済研究室、1959 年、5～6 頁。
(54)前掲、原田禹雄訳注『陳侃　使琉球録』、275～276 頁。前掲夏子陽・王士禎撰『使琉球録』、185 頁。
(55)前掲、原田禹雄訳注『李鼎元　使琉球記』、575 頁。
(56)李鼎元『師竹斎集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、191 頁。
(57)汪楫『観海集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』上、56 頁。
(58)胡靖『中山詩集』、前掲『国家図書館蔵琉球資料匯編』上、291 頁。
(59)斉鯤『東瀛百詠』、前掲『国家図書館蔵琉球資料三編』下、322 頁、326 頁。
(60)前掲、郭汝霖『重編使琉球録』、58～59 頁。
(61)前掲、夏子陽・王士禎撰『使琉球録』、116～118 頁。
(62)前掲、胡靖『琉球記』、289～290 頁。
(63)前掲、張学礼『使琉球紀・中山紀略』、655～656 頁。
(64)前掲、趙新『続琉球国志略』、253 頁。
(65)前掲、徐葆光『中山傳信録』（第一冊）「針路」9 頁、「前海行日記」15 頁。なお、周煌『琉球国志略』巻五「山川・海・針路」（前掲台湾文献叢刊第 293 種（第一冊）138 頁）にも類似する記載がある。

附記　本論文は、山陽学園大学平成 29 年度学内研究補助金によって進められている研究成果の一部であり、ここにて厚く謝意を表する。